宮崎県清武町の乳岩全景

乳岩・地母神の石　日向灘沿いの巨石信仰

谷口　実智代

はじめに

宮崎県内にはふたつの「乳岩」がある。日南市の鵜戸神宮と、宮崎郡清武町丸目の乳岩様である。それぞれ岩屋の形状を示し、乳（のような白濁した水）がしたたり、「その乳を幼いウガヤフキアエズノミコトが飲んだ」との伝説が残されている。またそれらの伝説は、記紀に言う日向三代の神話に由来し、その岩は現在でも信仰の対象とされている。この神話をふるさとの伝説として親しんだ私は、先に神話があり、その舞台として相応しい場所が選ばれ、奉られたのだと思っていた。しかし巨石信仰を中心に両地を歩いてみると、どうもそうではないらしいと思えてならない。そこで、巨石信仰の視点で両地やその近隣の地形を検証し、現地に残る言い伝えから共通点を模索するとともに他の地域に類似の伝説を求め、乳岩伝説が誕生した背景を探っていきたいと思う。そしてさらに、日向灘沿い、特に日南地方を中心として、「ウガヤフキアエズノミコト」をキーワードに、日本の神話の舞台に残るイワクラについて考察してみたいと思う。

乳岩に残された神話

ここでは、日南市と清武町の乳岩に伝わる伝説をまとめて見たいと思う。

㊀　日南・鵜戸神宮の乳岩伝説

その昔、ヒコホホデミノミコト（山幸彦）は、兄・海幸彦から借りた釣り針をなくした。それを捜しに出掛けたワタツミノミヤ（海宮）でトヨタマヒメと出会い、結婚。ヒメは鵜戸の窟で出産することになり、急いで鵜（う）の羽の産屋がつくられた。「お産の姿を決して見てはいけない」というトヨタマヒメの願いもむなしく、ヒコホホデミノミコトは産屋の中をのぞいてしまう。

そこには大きなワニの姿に戻って出産するトヨタマヒメの姿があった。ヒコホホデミノミコトは大変驚き、それを悲しんだトヨタマヒメは、幼い御子のために左の乳房を引きちぎり、窟の腹に打ちつけて海原の国へ戻ってしまった。これが今も洞窟の奥に残る「乳房石（おちちいわ）」である。そして幼いウガヤフキアエズノミコトの乳母としてトヨタマヒメの妹のタマヨリヒメが遣わされた。成長したウガヤフキアエズノミコトは乳母のタマヨリヒメと結婚し、神武天皇が産まれる事となる。

日南市鵜戸神宮の乳岩

さて詳しくは後述するが、出産の際にトヨタマヒメが姿を変えたとされるのがワニ、またはサメ、大蛇、龍などの諸説があることを述べておきたい。竜宮から来た海人の姫であり、大きな海獣を思わせる容貌。これがヒメの本来の姿であり、出産の際には本来の姿に戻るという風習が海神族にはあったことが強調されている。

② 清武町丸目の乳岩様

遠く神代の時代、ヒコホホデミノミコトがタマヨリヒメを伴い鵜戸神宮より高原町狭野神社に旅をされ七浦七峠を巡り青島から木花を経て荒平山山稜（丸目山と呼ぶ）にさしかかれた時にタマヨリヒメに抱かれていたウガヤフキアエズノミコトが乳をほしがり大声たてて泣き声をたてられた。当時乳の出ないタマヨリヒメが大変困り果ててふと頭上の岩を見上げると、二つの乳形岩よりポタリポタリと白い雫が落ちていた。これがまぎれもなく乳で、タマヨリヒメは直ちにこれを竹筒に入れて泣きじゃくるウガヤフキアエズノミコトに飲ませると、すぐに泣きやみ、起死回生無事に大事の旅を終え、田野に下り、青井岳を越えて霧島山麓の狭野の地に着いた。その後ヒコホホデミノミコトは、乳が出なくて困っている者のために、乳岩の下に社を建て、乳岩神社として祭らせた。これが乳岩様であるという。

トヨタマヒメの妹・タマヨリヒメもやはり母乳がでないか、もしくは母乳を与えることが出来ない状態であり、岩からしたたる乳を子供に飲ませている。なぜならトヨタマヒメもタマヨリヒメも、イルカやクジラなどのような水棲の哺乳類ではなく、本来の姿はサメやワニなど哺乳類以外の水棲生物である海宮の神である。この神話は神と人との婚姻つまり異類婚の神話であり、さらにサメやワニをトーテムとする海人系の人々と天孫系の人々、種を異にするもの同士の婚姻を通じた新たな関係性の構築が語られた神話である。また、このふたつの神話は全く別々の神

清武町・乳岩神社

日南市鵜戸神宮の亀石

この「岩からしたたる乳」とは、何を表しているのだろうか。

母体としての岩

ふたつの乳岩は岩屋の形状をしている。海に向かって大きく開いた海食洞窟の中に本殿が建てられた日南市の鵜戸神宮と、清武町の乳岩は洞窟ではないが、いくつもの巨石が折り重なり、岩屋を形成している。この「いくつもの巨石で構成された岩屋」が宗教的施設として機能している例は宮崎だけにとどまらず、お隣の鹿児島県にもいくつか見られる。（鹿児島市・春山、大隅町・岩川、市来市・川上地区、日置市・日吉、錦江町・旧田代町など）そしてそれらの多くは「岩屋観音」と呼ばれており、母性を髣髴させる観音様が奉られている。そのいずれもが子育てや安産のご利益があると伝えられている点からも、岩屋や洞窟に母性の守護を求めていることがわかる。話ではなく、そして重複する内容が元になっているわけでもない。連続する時間軸上に存在しているのだ。つまり、日南市の鵜戸神宮から清武町・丸目を経て高原町の皇子原に至る移動線上に残された神話である。すなわちこの二ヶ所の神話はつながっているのだ。そのキーワードがウガヤフキアエズノミコトであり、彼と密接に関係する巨石信仰、とりわけ貴人が「岩からしたたる乳」を飲んで育つという点に上げられる。

そこに私は地母神信仰を感じるのだ。

洞窟や折り重なる岩々でくぐもった岩屋は、地母神の子宮であり、そこを巡る「胎内めぐり」は修験道などの行にも見られる。この場合、巡った洞窟から外に出る行為は生まれ変わりを意味し、母体である地母神からの誕生を体現し、地母神の子供として加護を得る（権利を得る）ことが目的と見ることができるだろう。そして白濁した液体がしたたる岩は、乳があふれる地母神の乳房であり、白濁した液体を飲む行為は地母神の乳を飲むことになる。そして「岩からしたたる乳」を飲むことで岩屋を巡る胎内めぐりと同じように地母神の子供として、その加護を得ることが許された、権利を与えられたとみなされたのではないだろうか。岩からしたたる白濁した液体＝乳は、地母神からの賜物である。このような大地を母体と見る地母神信仰は日本だけのものではない。はるか古代から広く全世界的に存在する。たとえば、ギリシャ神話のガイアやヒンドゥー教のパールヴァティーなどがそうだ。『日本書紀』で語られる月読神が保食神を斬り殺すとその身体から穀物が生えたという神話、殺された神や人の体から作物が生えるというハイヌウェレ型の作物起源神話も、地母神信仰の一種であろう。

また洞窟・岩屋だけにとどまらず、大地から切り離された巨石に対しても地母神に由来する母性への信仰を垣間見ることができる。一般的に起立する巨石はインドのリンガのように男性自身を表し、力強い守護を父性に求めているかのように思われる。たとえば霧島山地周辺に見られる田んぼの守り神・田の神さぁの石仏、中でも農民型と呼ばれる石仏を裏から見ると男根の形をしていることがわかる。これに対して南九州においては石や岩に母性を見出していたと思われる例がいくつか存在している。「さわると乳の出がよくなる」とか、「お産が軽くなる」とか、安

産の神様や子育ての神様として巨石が奉られている例がそれで、先に紹介した鹿児島県の岩屋観音も安産の神様である。縄文遺跡から出土する岩偶にも、女性器を表す窪みが彫り込まれている例がある。そのものズバリの造形物が古い町並みの一角に石仏として奉られ、ドキリとさせられることも少なくない。また一般的に「天の岩屋」と呼ばれる岩戸開きの舞台となったとされる洞窟や岩の裂け目は大地に空いた大穴であり、女神のホトの表れであろう。余談ではあるが、「天の岩戸」と呼ばれる洞窟には、縦割れの岩の裂け目が多く見られるように感じる。これはまさしく大地の母神の性器であろう。

鹿児島県大隅町の投谷八幡

宮崎県串間市の岩折神社

このように、巨石信仰が安産や子授け・子育ての守り神に結びつく例は、鹿児島県および宮崎県南部の、特に海岸沿い、つまり日向灘沿いにみられるように思われる。（鹿児島県隼人町・石体宮、大隅町・投谷八幡、宮崎県串間市・岩折神社、都城市・母智丘神社など）

そこになにか共通する風習または思想のようなものを感じられはしないだろうか。海と大地の出会いの物語が、日本神話の舞台に残されていると考えられるのではないだろうか。

彼の地の乳岩・黒潮の流れの先に

日南市と清武町。こんなに近い地域にふたつも乳岩が存在するのだから、さぞかし日本全国には乳岩と称する石がたくさんあるのだろうと思ったら、どうもそうではないらしい。主にインターネットを使って検索してみたところ、宮崎県以外に三ヶ所「乳岩」と呼ばれている場所があることがわかった。ひとつは愛知県新城市の乳岩峡。乳房を髣髴させる白い岩肌が印象的な乳岩山という岩山一帯を乳岩と称し、洞窟が多く鍾乳洞も存在する。ここには子安観音が奉られている。次に京都・大非山の乳岩。『拾遺都名所図会』にも記載されているこの乳岩は、ここの水を飲めば乳の出が良くなるという言い伝えがある。

そして特に宮崎の乳岩との共通点があると思われるのが、和歌山県、世界遺産にも登録された熊野古道にある滝尻王子の乳岩である。ここには次のような伝説が伝わっていた。

奥州平泉の棟領、藤原秀衡は四十歳になっても子宝に恵まれなかったが、熊野権現へ十七日間の願をかけ、一心不乱に祈ったところ、不思議や妻が身ごもった。喜んだ秀衡は、懐妊七か月の妻を連れて、熊野へお礼参りに出発した。滝尻の王子社に詣でたところ、五大王子が現われ「里の山頂に洞穴で子を産み、岩屋に預けて熊野へ詣でよ」とお告げがあった。ほどなく妻は産気づき、岩屋で男児を出産した。産まれたばかりの赤ん坊をそのまま岩穴に置いて熊野へ向かった秀衡と妻は、無事、参詣を終え岩壁に駈け登ってみると、赤ん坊は一匹の大きな

狼に守られながら、岩の間からしたたり落ちる乳を飲んで生きていた。後にその赤ん坊は泉三郎忠衡という武者になった。

岩屋で産まれた赤子が、岩からしたたる乳を飲んで育ち、長じて有名な武将つまり貴人になったという伝説である。熊野と鵜戸の間につながりがあり、これらの伝説が生まれた背景に共通する文化的交流、たとえば人的な移動などが、あるひとつの物語を下敷きとして、それぞれの土地や時代にあった形で浮上してきたと考えることもできるだろう。もっとも、ウガヤフキアエズノミコトの誕生譚は国の歴史書に記された話である。それ自体が下敷きになりうる。またこの話が源義経と関係の深い奥州平泉の藤原秀衡、その三男の忠衡が主役であることが面白い。今回は紙面の関係からこれ以上の考察は別の機会に譲るが、山伏や海人、武士の存在がこれらの地域に大きな影響をもたらしていることはとても興味深い。

日向と熊野。これらの伝説に登場する人物や伝説が残された地域には、ある共通のキーワードがあると考えられる。それが、黒潮、親潮など太平洋側の潮の流れである。

海洋民のトーテム

先のウガヤフキアエズノミコトの誕生譚には、南方系海洋民族に伝わる神話の影響がみられることは、よく知られたことである。海神の娘・トヨタマヒメの出産時の風習、入り口のない小屋にこもり、火をたいて出産のときを迎えることや、本来の姿に戻ったトヤタマヒメが大きなワニ（サメ）であったとする話などにその特徴が現れているそうだ。ワニやサメは、ウミヘビ、カメなどと同じく南方系海洋民の祖霊信仰のシンボル、トーテムの代表的動物である。なぜこれらの海獣がトーテムとして好まれたのか。おそらくはその習性と姿に起因するものであろう。海に生活の糧を求める人間にとってこれらの海獣は獰猛で恐ろしい畏怖の対象となっていたはずだ。海流に沿うように身をくねらせ、素早く忍び寄る大きな口、そして三角形の頭部。成長した姿は人間よりも大きくなるものもある。それらのモチーフは伝統的な衣装の模様や建物の装飾などによく使われる。そして、おそらくはそれらの姿が影響していると思われる巨石を、日本の海岸部にも見ることができる。俗に「立神」と呼ばれる岩がそれで、海岸からさほど遠くない海面に起立する岩、もしくは海辺から遠い場所にあっても川や湖など水辺の近くに立つ石柱のことを、そう呼ぶ場合が多い。沖縄やその周辺の島々に伝わるものが有名であるが、このような立神信仰が伝わる地域に限定されたものではない。竜神や海神に由来する言い伝えが残された岩は、北は北海道から南は沖縄まで潮の流れに沿うように残っている。海流に乗って移動した人々が、細長い身体を天に向かって伸ばし、三角形の頭部を持った海獣の姿をトーテム、または守り神として岩に投影した背景がうかがえる。先の乳岩の伝説同様、直立する石柱に対する巨石信仰は、海を渡って移動する人々によって各地に伝えられたのではないだろうか。

鹿児島県吾平町の立神

女神の子宮に見立てた洞窟、乳がしたたる岩、直立する石柱。大地と岩、そこから切り離された石を人体（神体）と見なす巨石信仰は、多様な姿で各地に残されている。

祭場としての巨石

そこに伝わる神話と地理的な関係から、おそらくはつながりがあると言えるであろう日南市・鵜戸神宮の乳岩と、清武町・丸目の乳岩に戻って、もう一度この石達を見ていこう。洞窟や岩屋がその形状から地母神の子宮に見立てられることは述べたとおりだが、他にもこの両地には巨石信仰につながる共通点がある。そのひとつが「子産み石」だ。

波や風雨に洗われて岩壁や岩の中から丸い石が顔を出す。それを「石が子を産んだ」とみなして「子産み石」と称し、子授けや安産の神として奉られるものだが、清武町・丸目の乳岩の「乳房のように丸い石」は、この子産み石と呼ばれる形状の石が、今まさに産まれ出ようとしている姿に見える。そのような視点でもう一度乳岩と呼ばれる石を見上げると、この石が浮き出ている大きな岩全体が地母神の姿に見えてくる。胎内くぐりのように折り重なる石も、門のように起立する石も、巨石信仰にはつきものである。また、日南市・鵜戸神宮に目を転じると、その朱色も鮮やかな本殿が鎮座する巨大な海食洞窟の入り口に、清武町・丸目の乳岩とそっくりな丸石が産まれ出ようとしている姿が見て取れる。おそらくこれらの子産み石も、信仰の対象となるべき条件の一つであったのだろう。

さらに両者には、神社の狛犬に相当するような巨石の存在が知られている。清武町・丸目には乳岩からそれぞれ役三百メートル離れた山中に「オツキオンジョ岩」「オツキバジョ岩」と呼ばれる二メートル四方の巨石を二段に重ねた石がある。その岩にはこんな言い伝えが残されている。

『大男の弥五郎どんが重ねたと伝えられ、オンジョ岩は風が吹く日にはバッサバッサとわらを打つ音がして、バジョ岩からはザーザーと糸をつむぐ音がするそうだ』

この不思議な名前は「オンジョ」がおじさん、「バジョ」がおばさん

清武町乳岩の子産み石

日南市鵜戸神宮の子産み石

清武町乳岩周辺地図

清武町乳岩付近のオツキオンジョ岩

という意味がある。その配置からいっても、「オツキ＝御付」という名称からいっても、狛犬のような役目を負わされているのだろう。

一方、日南市・鵜戸神宮の境内には注連縄が張られた石に、「神犬石」という札が立っている。横から見るとピンと耳を立てた日本犬のように、鵜戸神宮のご神体山である吾平山陵の方を向いている。まさに、狛犬だ。しかしそれにしては相棒が見当たらない。狛犬であるなら、参道を守護する門番のように二匹いなければバランスが悪い。よく見ると参道の向かい、土産物店の前にも大きな岩があり、足元に小さな祠がある。丁度両方の巨石は参道を挟むような位置関係になっているので、これが巨石の狛犬の片割れかもしれない。

日南市鵜戸神宮の神犬石

古来、神社には社殿はなく、自然の山や巨石、樹木などをご神体として奉ったといわれている。神社のご神体・イワクラが鎮座する祭場の構築物、狛犬や鳥居（石門）すら自然にそろった、もしくは自然の巨石や山を加工して祭場を整え、神を奉った名残が、この両方の乳岩には垣間見ることができるのだ。これらのイワクラを奉る祭場を構築する道具立てには、何か法則がある。神社に鳥居や狛犬が不可欠なように、寺院に五重塔や鐘つき堂があるように、イワクラを奉る祭場を構築する石の並びには法則があるはずだ。

名もないイワクラ

さてもうひとつ、これは正確には記録も言い伝えも残されていないので、祭場を構築する施設として数えてよいものかどうか迷うところだが、ぜひ今後保存を前提とした調査を行っていきたいと思っている名もない巨石をご紹介したい。

現在清武町・丸目の乳岩周辺では東九州自動車道の工事が進んでいる。その工事現場で、謎の巨石が姿を現した。巨大な生物がのたうつような大きな岩の頂を持つ尾根の突端に、三角形にそびえる巨石が建っている。その巨石には目玉のような窪みがあり、サメのような海獣の目を思わせる。足元は台座のように重ねられた方形の石が横たわり、麓には丸い石がおかれ、人の手が加えられたイワクラではないかと思われる。その目は宮崎市南部の修験の山・双石山の方角、つまり東南を見据え、地母神たる乳岩の眷属のごとき風格で、

清武町乳岩付近の謎のイワクラ

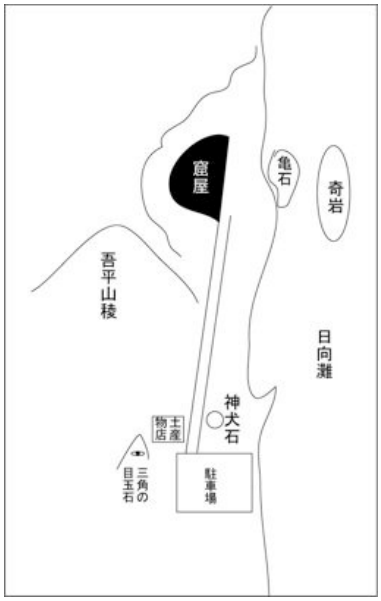
ゆったりと工事現場を見下ろしている。

このように小高い山や丘の山頂に特徴的な巨石の配置があり、その麓に丸石が奉られている例は宮崎市内でもしばしば見られる。その場合、巨石は川などの水辺の近くにあり、麓の丸石には水神様が奉られている例が多く見られる。この巨石の近くにも新池という水場があり、工事のせいかもしれないが小さな水の流れが麓を走っている。工事計画の中でこの巨石の破壊は予定されてないそうだが、工事の仕上がり次第では埋められてしまう恐れがあるそうだ。まだ工事はしばらく続くそうなので、現場責任者の許可を得て見学に行くことは可能だ。せっかく姿を現したイワクラである。願わくば破壊されたり埋め立てられたりすることなく、保存されて調査の機会を後世に残してほしいものである。

日南市鵜戸神宮不動明王磨崖仏後ろのイワクラ

清武町・丸目の乳岩周辺の謎のイワクラと類似のものが、はたして日南市・鵜戸神宮の境内もしくはその周辺に存在しているとしたらどうだろう。従来知られている社寺の形式や巨石信仰の道具立てとは一線をかす、この両地独特の祭場の特徴が浮かび上がるのではないだろうか。おそらくこれがそうなのではないか、と思われる巨石が鵜戸神宮の境内にある。鵜戸神宮には磨崖仏があるが、不動明王の磨崖仏の背後に巨大な三角形の巨石が立っている。巨石には清武町・丸目の乳岩近辺の謎の巨石のように、目玉のような窪みがある。樹木を羽織った姿からにじみ出る風格は、不動明王のそれすら凌駕するように見えるイワクラだ。もともと巨石信仰の対象となった巨石や岩壁に、後から磨崖仏や磨崖凡字が掘られたり、祠が建てられたりする例は各地で良く見られる。巨石信仰の視点に立つと、鵜戸神宮の不動明王の磨崖仏には、先に目玉を持つ三角形の巨石・イワクラに対する信仰があり、後の時代になってから不動明王の磨崖仏が置かれた可能性は充分に考えられるだろう。

聖地は動かない。仏教や神道、時代の変遷によって信仰の対象や信じる神が違うものに塗り替えられても、その痕跡は必ず残るものである。私は両地の目玉状の窪みを持つ三角形の名もない巨石は、古い時代の忘れ去られたイワクラであると思うのだ。



日南市鵜戸神宮境内

三角形のイワクラ、目玉を持つイワクラ

三角形の巨石や目玉のような模様や窪みがある巨石に対しての信仰は、この両地の乳岩だけにみられる例ではない。三角形の巨石に対する信仰としては、お隣大分県の西寒田神社の本宮山山頂の石組

みや、兵庫県六甲山の甑岩や剣岩の石組み、熊本県・南小国の押戸石などの例がある。八ヶ岳山麓の縄文遺跡で有名な尖石遺跡は、その名前の由来となった三角形の尖石が縄文時代から信仰の対象になっていたとみられている。目玉模様を持つ巨石としては、岐阜県山岡町の石戸神殿巨石群の目玉石、愛媛県の瀬戸内海にある高島の目玉石、青森県・入内の石神神社、新しいところでは鳥取県境港市の水木しげるロードの中にある妖怪神社に奉られている。また、茨城県・筑波山には三角形の巨石の側面に目玉模様を持つイワクラの存在が報告されている。このように、日本の巨石信仰はその対象となる巨石にある一定の特徴がみられる。三個の石の組み合わせは神の依り代としてのイワクラの特徴のひとつである。それと同じように起立する三角形やおむすび型の石、目玉の模様を持つ石は信仰の対象となる可能性を秘めている。このような点からも、全く記録は残されていないが、清武町・丸目の東九州自動車道工事現場で発見された謎の巨石および日南市・鵜戸神宮境内の不動明王磨崖仏の後ろの目玉模様のある三角形の巨石は、巨石信仰の対象とされていたイワクラが、その記憶が薄れ、他のものが信仰の対象にすり替わったり、その存在自体が全く忘れ去られていたものである可能性が非常に高いと思われる。さらにこれらのイワクラは祭場を構成する施設であり、三角形の目玉石、狛犬または石門のような巨石、そしてご神体なる乳岩が全部セットになって、ひとつの大きな巨石信仰の施設を構成しているのではないかと考えられる。

熊本県南小国町の押戸石

海に向かう巨石の祭場

これまで見てきた乳岩および名もない三角形の目玉石は、日向三代の天皇の中のウガヤフキアエズノミコトに縁のあるイワクラである。さてこのトヨタマヒメの息子・ウガヤフキアエズノミコトとタマヨリヒメ(トヨタマヒメの妹)との間に生まれたのが、皇祖・神武天皇である。古来、日向と呼ばれた宮崎の土地には神武天皇にちなむ巨石信仰やイワクラも少なくない。その中でも巨石信仰の祭場がベースになったのではないかと思われる神武天皇ゆかりの神社をご紹介したい。

宮崎県日南市の駒宮神社である。幼少の頃、狭野の尊と呼ばれた神武天皇は高原町の皇子原に住まわれたが、長じて宮崎に移るまでの間、元服のころまではここ日南市の駒宮神社にいたというのだ。海で釣りをしていたとき、白髪の老人から龍馬を与えられ、「龍石」と名付けた。その馬に乗って鵜戸神

日南市駒宮神社の御鉾の窟

宮の父・ウガヤフキアエズノミコトに会いに行った話が伝わっている。もちろんこの龍馬と神武天皇に関する石がいくつか存在する。神武天皇が入り江から船に乗る際についた草履の跡が「草履石」、馬の足型がついた「駒形石」などがそれである。ちなみに境内社の中でも圧巻なのが「御鉾の窟」で、愛用の鉾を納めたといわれている巨石である。この石の上部は海食のあとなのか、巨獣を思わせる風貌をしており、棚のような浸食跡に小さな祠がおいてある。滑らかな腹部には巨大な杯状穴のような穴が開いている。もしかしたらこの穴も、子産み石の産まれた痕なのかもしれない。良く見ると風化が進んでいるが、小さな杯状穴がいくつも空いている。もしこれが人工のものであるなら、何かの星座を表しているかもしれない。最も注目に値するイワクラである。また、現在は車払い所にも使われている神日本磐余彦天皇・猿田彦之命・宮毘姫之命を祀る、宮毘之社の背後にも立派な巨石のイワクラがあり、本殿背後の山中にもいくつもの巨石が存在する。果たしてこれらもイワクラとして数えられるかどうか、今後の調査の課題である。

駒宮神社　宮毘之社

今後のイワクラ研究の課題にかえて

巨石信仰の対象として、日南市・鵜戸神宮と清武町・丸目の乳岩を比較しながら論じてみた。なお日南市・鵜戸神宮については本文中に紹介した事例のほかに、運玉投げの亀石や、海に面した夫婦石などの奇岩も巨石信仰の対象のイワクラであると言えるだろう。そして再度強調しておきたいのが、清武町・丸目の乳岩は、現在伝えられている岩に浮き出た丸い石のみが信仰の対象ではなく、石が浮き出た大きな岩塊全体を女神の母体とみなした巨石信仰であり、その宗教的施設の一部としてオツキバジョ岩・オツキオンジョ岩があり、また道路工事に伴い露出した巨石もその宗教的施設の一部である可能性が高いと思われる。そして残念なことに、これらは周辺の開発により破壊の危機にあると言わざるを得ない。

そしてそれらが連続する神話の舞台に実際に存在しているものであることから、単独の信仰対象物または宗教的施設で終わらず、何かの道しるべのようにイワクラをたどることによって神話を体感できるという特徴を示している。山幸彦ことヒコホホデミノミコトとトヨタマヒメを奉る青島神社とその子ども・ウガヤフキアエズノミコトを奉る鵜戸神宮の間には塩筒大神を奉る野島神社があり、ここで毎年十一月二十三日に行われる野島神楽は、境内の巨岩に注連縄をめぐらせ、その前で舞われている。このような神社群を巡ることにより、日向神話のとおりに、海から内陸である霧島連山の麓まで移動できることから、これらのルートは実際に使われていた移動ルートであり、その移動ルートは神話の神々のモデルとなった一族の移動ルートではないかと夢想してしまうのだ。まさにこれらのイワクラは道しるべであり、それを証明するように、道開きの神・猿田彦神が摂社や末社、配神として奉られていることが多い。

近年、開発により破壊される未調査の巨石遺構が後をたたない。名前も由来も忘れ去られた巨石で

も調査研究の対象の価値があるイワクラも含まれているかもしれない。そのような巨石遺構を丁寧に調査研究することで、消えかかる日本の巨石文化の存在を掘り起こすことで、隠された歴史を垣間見ることが出来るかもしれない。文字のない時代から続く巨石信仰は、記録や遺物が残されている例が少ない。その形状や配置から人為的なものを感じ、信仰の対象もしくは人の意思が投影された「形」を読み取り、検証していく作業が必要となってくる。それこそ、神がそこに降臨したことを感得するイワクラの祭主のように。その作業は困難を極めてなお実証することが難しいと予想されるが、せめてこうして神社に残されたイワクラたちの声を聞き、今後の研究につなげていきたいと思う。

（了）

宮崎市内海の野島神社

【参考資料】

『上代の日向延岡』鳥居龍蔵　一九三五年（鳥居龍蔵研究所）

『日向の国　諸県の伝説』瀬戸山計佐儀　一九八八年（三州文化社）

『宮崎県史』宮崎県編集　一九九一年（宮崎県）

『日南市史』日南市史編さん委員会編集　一九七八年（日南市）

『清武町史』清武町編集　一九六〇年（清武町）

『大隅町誌』大隅町誌編纂委員会編集　一九九〇年（現在　鹿児島県曽於市）

『みやざきの神話と伝承一〇一』宮崎県企画・編集　二〇〇〇年（宮崎日日新聞社）

『イワクラ～石の声を聞け』イワクラ（磐座）学会　二〇〇五年（遊絲社）

『イワクラ2号～古代巨石文明の謎に迫る』イワクラ（磐座）学会　二〇〇八年（シオンライブラリーサービス）

『宮崎県神社誌』宮崎県神社庁　一九八八年（宮崎県神社庁）

『串間の民話と伝説』串間市教育委員会編集　一九九四年（串間市教育委員会）

『日本の伝説 39　紀州の伝説』中村浩・神坂次郎・松原右樹　一九七九年（角川書店）

『石の宗教』　五来重　一九八八年（角川書店）

『新・石の伝説』　石上堅　一九八九年（集英社文庫）